

監修

新村出
山岸德平

高木市之助
小島吉雄

久松潜一

上田秋成集

重友毅校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

重友 毅（しげともき）

明治三十二年山口縣生。大正十三年東京大學國文學科卒業。法政大學教授。主著―雨月物語の研究、日本近世文學史、雨月物語評釋、近松淨瑠璃集、近世文學史の諸問題等。

日本古典全書

「上田秋成集」 重友毅校註

昭和三十二年二月十五月初版發行
昭和四十二年五月二十日第七版發行
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田區有樂町・大阪市北區中之島・北九州市小倉區砂津・名古屋市
中區榮）

定價 四六〇圓

目次

解

説

上田秋成

雨月物語

藤篋冊子(抄)

春雨物語

癩癖談

結語

秋成研究書目

作品集

註釋書

研究書

目次

三

三

一四

三

三

三〇

三五

四〇

四〇

四四

四四

一

上田秋成略年譜

凡 例

六

本 文

〔雨月物語〕

三

雨月物語卷之一

三

1 白 峯

三

2 菊花の約

六

雨月物語卷之二

八

3 浅茅が宿

八

4 夢應の鯉魚

九

雨月物語卷之三

一〇六

5 佛 法 僧

一〇六

6 備津の釜

一五

雨月物語卷之四

一七

蛇性の姪……………一七

雨月物語卷之五……………一五三

青頭巾……………一五三

貧福論……………一六

〔藤簍冊子(抄)〕……………一七一

月の前……………一七一

劔の舞……………一七七

〔春雨物語〕……………一八三

血かたびら……………一八四

天津處女……………一九五

海賊……………二〇四

二世の縁……………二二三

目ひとつの神……………二二八

死首の咲顔……………二三五

捨石丸……………二三七

上田秋成集

四

宮木が塚

二四六

歌のほまれ

二五七

樊噲 上

二五九

樊噲 下

二七七

〔くせものがたり〕

二九五

癩癖談 上

二九七

癩癖談 下

三二四

上田秋成集

重

友

毅

解 説

上 田 秋 成

本書に収めた諸作品の作者として、始めに上田秋成の生涯について、概観を加へることにしよう。

秋成は享保十九年（一七三四）、いはゆる享保の改革が、それなりの成果を擧げて、やうやく終末に近づかうとする時期に、町人の都といはれた大阪の土地に生れた。町人の都とはいつても、それがその名にふさはしく、活氣に満ちた經濟の營みをつゞけ得た時代は既に過ぎ去り、それを更に窮屈なものとする幕府の緊縮政策が、今しもその仕上げを終らうとする時期に際してゐた。三、四十年前までの、はなやかな元祿文化を培ひ、育^{はぐ}んで來たこの土地も、今やその肥沃な地味を使ひへらし、わづかに残りの養分に一縷の望みを託するといふ状態を迎へてゐた。政治の中心は江戸にあり、そこで企てられた幕府の自己保全策は、強い壓力となつてこの土地の上にも覆ひかぶさつて來てゐた。日常表面の生活はおだやかなものに見えても、一步深く突き進まうとする時には、重苦しいものが感じられないではゐなかつた。しかもこのやうな

政策は一時的なものではなく、この享保の改革を手始めに、一定の時期を隔てては、二たび三たびと繰返されるのであり、いはゆる寛政の改革、天保の改革と呼ばれるものがそれであつた。そしてそれらは、幕府存立の基礎が危ふきを加へれば加へるほど、取締りの強化を伴ふものとなつて行つた。もちろん、これらの反動政策に對して、農民の一揆、都市窮民の打毀^{うちこ}しなどが見られはしたが、それらも窮狀に堪へかねての蜂起に過ぎず、深く問題の所在を突き止めての蹶起ではなかつた。更にそこまでに至らぬ一般庶民にあつては、不満は不満として抱きながらも、多くは漠然たる不安に捉はれるか、寂しいあきらめに落込んで行くかするよりほかはなかつた。たゞ少數の具眼者のみが、それとても政治の實體を見届け得たわけでは決してないが、おのづからに感得する人間性の抑壓に對して、それなりの抵抗をつづけたのであつた。秋成は、まさにこのやうな時代、更にいへば、享保の改革から寛政の改革へかけての時期を、ほかならぬ庶民の一人として、その生涯を送つた人であつた。

時代の環境が暗かつたばかりではない。その個人的境遇においても、彼は明るさに恵まれない人であつた。その素生は、本人も口を閉ぢて明かさないが、曾根崎新地に私生兒として出生したものであることは、ほとんど疑ひがない。しかし幸ひにして四歳の折、堂島永來^{やぐら}町の商家島屋（上田氏）に迎へられて、その家督をつぐべく定められた。そして養家には既に、彼には義理の姉にあたる實子があつたが、彼はそれに劣らぬ寵愛を受けた。殊に幼時の彼は虛弱多病であつたところから、養父母の一層のふびんがかけられた

らしいが、まもなく五歳の折に患つた悪性の瘡瘡は、危ふく彼の生命を奪ひ去らうとした。幸ひに周囲の丹誠で、九死に一生を取りとめはしたが、その病毒のために、右の中指と左の人差指とは、ともに屈して伸びず、不具に近い身となつた。かうして出生の始めから、早くも二つの不幸がかさなるのであり、これがやうやく物心ついてからの彼に大きな引け目を感じさせるものとなつたことはいふまでもない。

ところでこの重病に關しては、特筆すべきことがある。それは彼が危篤の狀態に陥つた時、養父はかねて信仰する加島稻荷に駆けつけて、その回復を祈つた。深夜のことで、思はず神前にまどろむうち、神の告げがあつて、その子の命を助けた上に、六十八歳の長壽を授けるとの言葉を耳にすると見て、夢がさめた。狂喜して歸つて見ると、果して難症も峠を越したところで、それよりメキ／＼と快方に向つた。この偶然の一致は、養父母の信仰を一層深めたし、それはやがて幼い秋成の耳に吹き込まれ、その胸に深く刻み込まれるものとなつた。彼は養父母に抱かれて、月毎にその社に参詣し、その習慣は成長した後も廢されることなくつた。のみならず、約束の六十八歳を迎へた享和元年（一八〇一）には、齋戒沐浴して詠んだ六十八首の歌を神前に獻じてゐる。もつとも彼はそれよりもなほ八年の年月を生き延びるのであるが、このいはば神の違約といふべきものも、そのあらたな恩賴として受取られ、不信の念を起すものとはならなかつたと思はれる。

この早くから植ゑつけられた神祕的觀念は、彼の生涯に重大な影響を及ぼすのであつて、さまざまの不

可思議の存在を許容する精神的基盤となつた。さうでなくても、怪奇の實在を信ずることは、當時の一般の風であつた。その上に彼はこの特殊の經驗をもつたのである。いやが上にも色濃い怪奇的幻想が、彼の頭腦を去來したことは、むしろ自然の勢ひといふべきであつた。物心つくにつれて、どこからともなく耳にする自己の出生にからまる祕密、そこから来る知られざる實父の面影に對する妄想も、いくたびか描いては消し、消しては描かれたものであらう。また醜い指の形に對する羞恥の念から、人前に出ることを憚つたと傳へられる彼に、人なき一室での徒然は、さまざまの幻想にふける機會を與へたことであらう。そしてそのやうな性癖は、後年國學者として、合理的な思考方法を身につけ得た彼によつても、つひに克服することを得ないものであつた。最晩年の隨筆『膽大小心錄』に於てさへ、彼はなほ幽靈の存在を信じ、狐狸の怪を信ずることをやめようとはしてゐない。

しかし、そのやうな彼ではあつても、少年また青年の日が、常にそのやうな暗さで塗りつぶされてゐたわけではない。若さのもつ生氣は、あらゆるものを吹き飛ばして、明るい日々を齎すこともしばしばであつた。さういふ際の彼にとつて、養家での生活は、感謝に満ちたものであるといつてよかつた。もつとも、彼の重病の折、真心こめて看病してくれた養母は、その後まもなく亡くなつたが、やがて迎へられた二度目の養母も、彼には慈愛の深い母であつた。數へると、實母を含めて、三人の母をもつたことになるが、この不幸は、さまで彼の心を曇らすものとはならなかつた。彼は養父母の恩愛に甘え、義理の子であるこ

とも忘れて、我儘三昧の日を送ることが多かつた。無學で遊惰な友人が、その相手であつた。

しかし、この間に一つの出来事がある。それは彼の義理の姉が、戀愛の相手を見つけて家出したといふ事件であつた。おだやかな養父ではあつたが、さすがにはげしい怒りの末に、これを勘當しようとした。

既に二十二歳を迎へてゐた秋成は、これを見て、實子を勘當されるなら、養子の自分にも暇をいたゞきたいと申出た。養父はしかし、實子と養子との區別は大したことはない。「心直き者」に家をつがせることは、聖人も教へおかれたことだ。お前が立去るつもりでも、自分の方で承知しないといふ。そこで秋成は、そのありがたい氣持を伺つた上は、姉のこともどうか自分に任せていたゞきたいといつて、ひそかに姉の隠れ家へたづねて行き、萬事を處理した上で、再び親子の對面をさせることに成功した。このことは秋成自身の自慢の種でもあつたが、また當時の彼の面目をうかゞふに足りる話でもある。即ち、表面は埒もなく遊び廻る彼ではあつたが、締るべきところは締つて、適正の判斷を失ふところのない人間であつたのであり、また養父の多年の觀察に誤りがないとすれば、純情な正義肌の青年として彼が成長してゐたことが知られるのである。

ところで、姉の件もこれで一應片付き、彼女もそれなりに幸福の境涯にはひつたのであるが、その後數年を経ないうちに、彼女は亡くなつたものらしい。その歿年月の詳しいことは分らないが、しかしそれほどぼかさなり合ふ時期に、秋成は妻を迎へることになつた。妻は京都九條の農家の生れで、大阪の植村家

に養はれてゐた、まといふ女性であつた。秋成が二十七歳の年のことであつた。かうして彼にもやうやく責任の重さが感じられて來ることになつたが、その翌年の六月には、養父の死去といふ思ひがけない不幸が襲つて來るのであり、あとにのこつた養母や妻を前にして、彼はいよく一家の支柱として家業に専心すべきであつたが、商賣といふことが彼の性格に合はず、また自由に過ぎたそれまでの境遇は、急な立直りを困難にし、依然として遊惰な友人を相手の氣儘な生活がつゞけられたのであつた。そればかりか、彼はいつとなしに遊蕩の味をさへおぼえるやうになつた。そしてこれについては、彼の出生の祕密にからまる、また指の不具にまつはる苦悶と絶望からの逃避であり排悶であるといふ見方も許されるであらうが、それはむしろ好意的に過ぎる見方といふことにならう。やはりそこには世上の蕩兒と同じやうな氣持がはたらいてゐたと見るのが眞に近いであらう。とにかくこのやうにして若い日の彼は、裕福な商家の若主人として、むしろ寛大に過ぎる養父母の慈愛のもとに成人し、また教養の低い友人たちを従へて遊樂にふけり、意の向くところほとんど通らぬものもないといふ生活を送つたと見ることができるのであり、したがつてそこにきはめて我儘な、苦勞知らずの人間ができあがつたことと考へられるのである。

しかしそのやうな生活を送るうちにも、生來文學的嗜好をもつたものと見え、俳諧をたしなみ、小説・戯曲類に目を通し、進んで和漢の古典にも探り入つて、相應の教養はたくはへてゐたのであり、三十七歳の折、眞淵門の國學者加藤^{うまさ}宇萬伎の下阪を迎へて入門を申込んだ時には、いきなり友人づきあひを以て遇

せられるほどの學力を示し得たのもあつた。そして早くも三十代の始めには、自身筆を執つて小説を書き始めてもゐた。三十三歳の正月に『諸道聽耳世間猿』^{しよたうきみせけんざる}が、三十四歳の正月に『世間妾形氣』^{せけんてかけかたぎ}が刊行された。これらはいづれも江島其磧^{きせき}らの八文字屋本の系統に立つもので、町人社會に材を取つて、そこに見られる人情・風俗を描いたものであつた。そしてそこには、先行作品に倣ふものがあるとともに、彼自身の見聞に關するものをも加へて、初期の習作としてはすぐれた出來榮えを示したのであつたが、しかし彼はやがてその作風にあきたりないものを感じて、『雨月物語』といふ、それとは全く性質を異にした作品に筆を染めることになるのである。それは三十五歳の年のことであるが、それがいよゝの仕上げを経て刊行を見るに至つたのは、それより八年後の、四十三歳の折のことであつた。

このやうにして、肝心の家業の方はあまり振はず、わづかに先代の跡を守りつゞけて行くに過ぎなかつたが、そのうちに彼の一家は、全く思ひもかけぬ災難に見舞はれることになつた。それは彼が三十八歳の年、近隣に起つた火事のために、彼の家も類焼して、ほとんど一物も留めないありさまとなつたことである。このことが彼の一家を非常の窮境に落し込んだことはいふまでもないが、それよりも彼にとつての打撃は、この不幸に陥つた彼に對し、昨日まで親しかつた者の示した、掌を返したやうな冷淡な態度であつた。彼はそこで始めて、世間の人の心の表裏を見て取つた。そしてこの迫られた世間學の習得は、それまでを順調に過して來た彼にとつて、かなりにはげしい刺戟であつた。そしてこの切實な經驗は、その後の

彼をして、世間一般に對して、反抗的な態度を取らしめるに至る有力な契機となつた。もちろんそこには早くから根をおろしてゐた、自己の出生や指の不具にからまるひが、心が結びついてゐたであらうことは疑ひがない。

ところでこのひねくれ根性は、どのやうな事情から來たにもせよ、結局は彼の對人生態度の弱さに歸著せしめられなければならないが、しかし同時にこのことを以て、彼が生涯に志を得ず、物質的また精神的に報いられるところが薄かつたことによるものとする見解は、斥けられるべきものと思はれる。さうではなく、それは彼の弱さではあるにしても、根本は彼が、このあまりにも醜惡で、卑屈で、打算的な世の中に、無神經に乗り出して行くに堪へきれないほど、清く、正しく、穢れのない心情の持主であつたことにその要因が探られるべきであると思はれる。そして彼がそのやうな心情の持主となつたについては、あの一面に於ては、彼をきはめて我儘な、苦勞知らずの人間に育て上げて來たところの恵まれた家庭的環境が、同時に一つの防禦壁となつて、必要以上に早くから世間の醜惡な裏面に觸れることによつて、若い純眞な魂を傷つける危険から彼を守つてくれるものでもあつたことが考へられるのである。さきの姉の家出事件に關して、養父がもらした「心直き者」といふ言葉も、こゝに思ひ合せられるべきであらう。かうした彼であつたから、罹災の後も周圍と安易な妥協をはかることなく、却つてそこを見捨てて、あらたに別の職業を選ぶこととなるのである。